

嘘

渡辺温

青空文庫

雪降りて退屈で古風な晩であつた。

井深君の邸に落ち合つた友達が五六人火のそばに寄つて、嘘吐き——話の話しくらべをした。自分の素晴らしい嘘で人を担いだ話や、またはそのあべこべのしくじり話やらをめいめいが語つた。

そしてきて、主人の井深君の番になつた。井深君は、誰よりも一番多くその生れ付きの中に小説家的な要素をもつていたばかりではなく、日頃の生活も当り前の様式とは少からず異つていたので——それらの点はこの話を聞くだけでも直ぐ察せられる事なのだが）誰も斉しく井深君の番になるのを待ち構えていたのだつた。

——偽瞞こそあらゆる芸術の本体だ、と誰かそんな風な事を云つた西洋人があつた。嘘と云つても、それが何人にもどんな損害をも与えない場合になら勿論少しも悪かろう筈はない。昔噺をして聞かせるのとちつとも変りはしないのだもの。僕は御存じの通り非常な空想家だ。それだから、つい思わぬ無用な嘘を吐く時がある。何故と云つて、空想を最も効果的に他人に伝えるためには、どうしても大きな嘘を吐かなければならない事になるのだから。……で、これから話す話は、僕がひよつとしたはずみにくだらない嘘を云つてしまつたお蔭で、意外な莫迦を見た話なんだがね。話の筋は極くたわいもないのだが、それでもよく考えてみると、何だかこうひどく妙な気がするんでね。尤も僕だから妙な気もす

るのかも知れない。だから君たちにはつまらないかも知れない。が、まあ話してみよう……

……お正月の松がとれてから未だ幾日も過ぎない頃であった。夕ぐれ近い空は雪空で、低く垂れ下がったまま白つちやけて凍りついていた。井深君は銀座を散歩していたのである。北風が唸りながら舗道の紙屑やごみを浚って吹いた。遠さすの銀座通りではあったが、行き交う人々はみんな身を竦めながら忙しそうにして歩いていた。井深君の如き純粹な散歩者は他には殆ど見当らなかつたと云つてもいいに違いない。井深君はそれこそもう散歩の中毒みたいになつていて、毎日々々たといどんなに空あんばいがすぐれ

なくても、どんなにひどい木枯が吹きまкруうとも、この日課だけは決して忽せにしなかつた。そしてその散歩に、人一倍おしやれな井深君は何時もきまつて中山帽をかぶり立派な黒服を着て出かけるのだった。——断つておくが、井深君の齡は、そんな身形みなりをして、未だ三十二歳には少し間があつて、しかもその實際よりも更に三つ四つ若く、つまり弱冠はたちそこそこにしか見えないような童顔をしていた。

で、とにかく何の用事もなく、何の的あてもなく、新橋の方から銀座通の左側の舗道をぶらぶら歩いて行つた。そして尾張町の四辻より一つ手前の四辻に差しかかつた時である。その角から不意に、まるでその横通りを吹き抜ける風にあおられた操人形マリオネットのよう

な足取りで、若い女がオレンジ色のジャケットを着て飛び出して来たのであった。帽子をかぶらぬお河童ボップドヘヤで赤ん坊みたいな顔をした娘であった。ところで、それがどういうつもりか井深君の前に危くヒョイと踏み止まったが、井深君の中山帽子の頂からスパッツをつけた靴の尖まで、ジロリと一つぺんに見上げ見下ろすと、さて身を転じて颯々と肩をゆすり乍ら歩いて行つたのである。

(まあ！　なんて女なんだろう！……)

井深君は今日が日迄幾百度となく、いや恐らく幾百度となく同じような身形で銀座を歩いた。併しついぞ一度だつて通り掛りの者なぞからそんな風にして見られたためしはなかつたのだ。だから屹度彼女は偶然井深君と見間違える程よく似た恰好の男をその

知己にもつていたのであろう。……が、たといそうとしても何という厚かましい不躰な眼付きだったのだろう！ ……育ちのよい少年の如く殊の外気弱な井深君は胸を動悸させ乍ら、逆毛立ってやわらかい草むらのように纏れ合っているお河童頭の後姿を見送った。

ところが、それから一時間も経ったかと思う頃、同じ場所でも、
またもや彼女と出会ったのである。井深君はその小一時間の間、
ブライヤアのパイプと一緒に整石の上を歩き続けながらも、喫茶
店でポストラムを啜り乍らも、如何にもそのへんな娘の姿が気にな
ってならなかった。それ程だから再びその四角へ通りかかった時
には、勿論横の通りを振向いて見る位の用意はあったのだ。それ

で振り向いてみた。すると曲り角からつい三間ばかりのところを、その娘がスペインの踊子のように両手を腰にかけて大きく肩をゆすりながら向うへ歩いて行くのである。甚だ奇妙なことであつたと云うのは、彼女が若しも其処の整石の中から突然せり上つて来て歩き出したのでもない限り、そのあたりは恰度××ビルディングの普請場の板いたべい囲いが続いているところだつたので、彼女がそうした工合に意気揚々と立ち出でそんな玄関口なぞは一つもなかつたのだから。

（おや——）と井深君は屹驚してちよつとの間足を停めた。その途端にオレンジ色の娘はクルリとお河童の頭だけを廻して井深君を見た。そしてあけっぴろげな笑顔でニッコリ笑つたものである。

が、直ぐまたすたくと威勢よく肩に波を打たせながら歩き出した。

（ははあ、あいつ、不良だな——）と井深君はその時はじめて気が付いた。

気早な冬の陽ではあつたし、それに空模様はいよいよ怪しくなつて来ていたので、もう四辺あたりの色合はすっかり物悲しげに夕づいて見えた。そのトワイライトの中を風に吹かれて、オレンジ色の大胆らしく大股に遠ざかつて行くのを見守っている中に、井深君はどう云うものか、ふと後をつけてみたい誘惑に囚えられたのである。……こんな風に云うと或は井深君を誤解する人があるかも知れない。併し実際は稀にみる温厚の士で、その年になって未だ

茶屋酒の味はおろか、飯を食べに這入るカフエだつて白粉の臭のしそうな家はひたに敬遠している程の井深君である。ただ、おそろしく気まぐれでその上並々ならぬ空想癖をもつていたために、それが偶々たまたまこうした思いがけない調子外れの行為となつて現われる迄の事であつた。

井深君は外套の襟を深く立て、ついていたスネエキウツド蛇紋樹のステツキを小脇にかい込むやもう一町も先の方へ小さく薄れて行くオレンジ色のジャケットを追いかけ始めた。井深君は人並より背の高い方であつたし、女の足の一町程ならば容易に取り返すことが出来た。が、そう早く追い付いてしまったところで、さてどうにもならない話なのである。井深君は少くとも五間の間隔を残して置か

なければならなかつた。娘はと云うのに、何も気が付かないらしい様で、無論そんな莫迦な事はあるべくもないのだが、とにかく決して背後に心を配るような素振などは見せもせず、真直に歩いて行く。そして何時の間にか、今しがたまであれ程派手で威勢のよかつたのに引きかえ、後姿ながらひどく元気を失い如何にも悲しげな恰好に首や肩をまるまるとすぼめているのであつた。

二人は間もなく山下町の河岸に出た。黒くよんだ河水は乏しい街燈が凍えて映つて暗く淋しかった。そして悪いことに到頭雪が降つて来たのである。しびれを切らしていたような勢いではげしく降つて来た。

井深君は、みるみる雪のために、帽子もかぶらないお河童の頭

とオレンジ色のジャケットが白く塗れて行くのを眺めているうちに、少々変な気持がし出した。

（はてな！ これは見損いをしたかな——）

だが、殆ど同時に娘もそれと同じことを考えたらしかった。そして俄に踵を返すと、まともに井深君の前へ立ちふさがった。

「?……」今にも泣き出しそうな子供の大きな眼で見上げた。

「今晚は——」と井深君は辛うじて云った。

「あたし、寒くて、それにお腹が空いて……」と娘はさもさもそんな風な声で云うのであった。

「何処か、この付近にいい家がある？ それとももう一ぺん銀座迄戻りましょうか。」

「いいえ、この直き裏の通りにあたしの知っている家があるわ。」と娘は赤くかじかんでしまった指で指さしながら云った。

「そう、じゃ其処へ行きましょう。」

井深君は娘を連れてその家へ行った。狭い路地を這入ったところにある見るからに不景氣そうな家で、青い花電気のさしている見世窓のガラスへ弓形にローマ字でカフェ・マンゲツとするしてあつた。

(マンゲツ……満月と云う意味かしら)

と井深君はそんな事を思い乍ら雪をはらつて其処の二階へ上がった。お客は他に一人もなかつた。それでも仕合せなことに、ガス・ストオヴが薔薇色の炎を輝し乍ら盛にたかれているのを見て

井深君はホツとした。

「召上り物は？」

更紗の前かけをかけたひねこびたような女給が、二人がストオヴの傍の食卓へ着くのを待つてそう云った。

「何？——」と井深君は娘に訊いた。

「何でも——」と娘はつつましやかに答えた。

井深君は少しく勝手が違っているように思った。娘が「あたしの知っている家」と云った以上、そんな女給ともよく識り合っていて、食べ物は何論万事さぞ気儘に振舞つてみせるだろうと考えていたのに、全くそうではなかったのである。そしてまた女給にしろ、娘に対してどんな特別な親しきをも、或は怪しきをも示さ

なかつた。してみると、娘が知っているのと云つたのは単にその家の所在を意味するだけのことらしい。二人は全くフリのお客に過ぎなかつた。

そこで井深君は、自分でも未だ夕飯前だったので、兎に角あまり上等ではないその家の料理を娘につき合つて食べた。娘はいかにもおぼおぼと振舞いはしたものの、彼女の胃袋は井深君の二倍の食慾をもつてむさぼり食べた。井深君はその様子を決して不愉快ではない、むしろ或る愛情をもつて観察した。年恰好は十六七位の見かけなのだが、それでも本当はもつと余計なのかも知れない。マシマロのように豊かな顔の輪廓に思い切り短く刈り上げてしまつたお河童がちつとも不自然でなくよくうつつていた。目鼻

立ちもわりに品があつてそう悪くはなかつた。殊に眼は、物を食べ乍ら時々見上げては極り悪そうに笑う眼は、睫毛が長く散りひろがつて、少しばかりやぶ睨みで、ひどく子供っぽい表情になつて可愛らしかつた。だがさて着ているオレンジ色のジャケットは、銀座通りでひよつと見た時には随分花やかで立派だったのに、よく見るともうすっかり古びてしまつて肩のあたりには大きな穴が三つもあいているのであつた。（おやおや、これはひどい——）と井深君は何だか急に果無いはかなものを見たような気がした。

やがて食事が終ると女給は張り合いの無さそうな挨拶をして階下へ降りてしまつた。

「さあ、御飯がすんだら、少し火のそばで暖まろう——」

井深君はそう云い乍ら椅子をガス・ストオヴの前へ引き寄せた。

「ええ。」娘もおとなしく井深君の真似をした。

「君、外套がほしいだろう?……」と井深君は薔薇色をしたストオヴの中を見たままで云った。

「ええ。」

「五十円もあれば買えるかな?……」

「そりゃあ、買えてよ……」

井深君はそこで黙つてふところから沢山の紙幣束を呑んで大きく膨らんだ紙入を出すとその中から五枚の草色をした紙幣を引き抜いて傍のテーブルに置いた。しかし、娘はそれを見ると周章で井深君の手をおさえて云うのであつた。

「いらないわ、いらないわ。……あたし、そんなにはどつきり、あんたからは貰おうなんて思わないわ。……五十円なんて——五円もあれば沢山。ほんとに五円もあればいいの……そうすればこの毛糸の上衣の穴が隠れる位の襟巻が買えるから。」

そうして娘は両手をジャケットの穴のところへ当てて、巧みに目ばたきをさせながら笑って見せたのである。井深君はそれを見ると一層ひどく可哀相になった。

「私が上げたくて上げるのだから、へんな風に遠慮なんかするものではないよ。ね、取ってお置き。」

「嫌。あたし、ほんとに要らないんですもの。……まあ、あなた！　とてもいいネクタイピンをしていらつしやるわね。」

娘は両手を肩に当てた儘、その肱をテーブルの上につき乍ら井深君の胸に目をつけてふとそんなくつ着かない事を云つた。

「これかい？——」

「ええ。ダイヤモンドでしょう。あなた、なかなかおしやれね。」

「——そんな事はどうだつていいじゃないか。それよりも早くこのお金をおしまいなさい。」

「嫌。あたし、そんなに沢山嫌よ。下さるのなら五円でいいの。」

「強情つぱりだね。けれども私だつてもつと強情つぱりだ。どうしても取らなけりや承知しないよ。——なぜと云つて、これには私としてみれば立派な理由わけがあるのだからね……」そう云つて、井深君は急に真面目な顔をした。

「理由？」

「うん。……君は今、私のタイピンの事を云ったね。このタイピンがその理由なのだ。まあ聞きたまえ。面白い話なのだから……」

「え、聞かして——」娘もちよつと面喰った様子で、井深君の顔とそのネクタイピンをば見くらべた。

「去年の春だよ。或る日、日が暮れたばかりでね、私はやつぱり銀座通りを散歩していた……」と井深君は両手の指を膝の上でくみ合せ乍らストオヴの方へ向いたまま話しはじめた。

「何時ものように、一つぺん新橋の橋の袂迄行き尽して、また引き返そうとした時だった。私はふとあすこの博品館の横手の薄暗がりの中に、ぼんやり立って、どうやら泣いているらしい恰度君

位の背恰好の女の子の姿を見出したのだ。身形はと云うと、お河童で橙色のジャケツを着て——つまり、君の今のなりと同じようなのだね。悪く思つちやいけないよ。大して変つた風と云うわけじゃなし、同じ身形の人が一人や二人いたつて、ちつとも不思議はないさ。——で、ともかく私はその女の子のそばへ行つてきいてみた。女の子はやつぱり泣いていた。そして、姉さんと一緒に銀座迄買物に来たのだが、はぐれてしまつて、電車賃もないし、家へ帰れない——とこう云うのだ。……なぜ妙な顔をするのだね？ そりやあ、無論その女の子は嘘を吐いたのさ。併し、私はその時はそれを嘘だと思わなかつた。その泣き乍ら物を云う様子は、どうしたつて、私の心にそんな冷めたい疑いをさしはさめる程の

余裕なぞ与えなかつたのだもの。私はすっかり同情してしまつて、その子に一円のお金を貸してやつた。するとその子は非常に喜んでね。そうしてそのお札にと云つて、持っていた伊^{イタリ}太利革の手提の中から一本のネクタイピンを——とり出すと、私がどんなに断つても、自分の手で私のネクタイにさしてくれると云い張つて聞かないのだ。私はそれで為方なく、（何と云う無邪気な面白い子なのだろう……）と笑い乍ら、どうせそんな年のいかない女の子が持っているのだから、二十銭位のおもちやかも知れないそのピンをさして貰うために、腰を屈めて首を差し出した。ところが、どうだろう。女の子はピンをさし終えるが早いか、突然いやに冷めたい手で私の両耳にぶら下がると、私の唇に接吻して、どんど

ん暗やみの方へ逃げて行ってしまったではないか。私は呆氣に取られて茫然としていた。……ところが、それから暫くして気が付いたのだが、私はその女の子のためにふところの紙入を掏られていた。つまり、一本のネクタイピンと素早いキスの代価をうまうまと支払わせられたわけになるのだね。……が、それはそう企んだ先方のとんだ見当違いでね。と云うのは、お恥しい話だが、私はその頃或る事情で甚だお金に困っていた。それで紙入にお腹を空かせて置くのも私の性分でへんにみつともない気がしたので、新聞紙をお紙幣の大きさに切つてどつさり入れて置いたのだよ。本物のお金と来たら五円も入っていないなかつたろう。……いいかね。そして、それに引きかえて、二十銭位だろうと思つたネクタイピ

ンは後でしらべてみると、どうして立派な物で大丈夫五十円の値打はあると云う品物だった。……尤もその女の子だって、何れもともとは何処からか不当な取引で手に入れたのだろうから、それ程高価な品物とは気が付いていなかったかも知れないのだが。：それにしても、私はどうも気の毒でならないのだ。私にはどうしてもあの女の子がそう大外れた悪者とは思えないのだがね。あんな無邪気らしい——と云っても何分暗かったので顔は到頭はつきり見る事が出来なかつたのだけれども。ひどく冷めたい手をしていた事だけは覚えている。一体手の冷めたい人間と云うものは、西洋の小説なぞにもよく書いてあることだが、たいてい内気でおとなしいものだ。屹度付近の物蔭にあの子を操っている悪い奴が

隠れていたのに違いないと思う。……話と云うのはそれだけだよ。で、つまり私はその時以来、このネクタイピンに対する相応の代価を、その女の子に遇ったならば返してやろうと心がけていたのだ。だが、それはどうも無駄らしい。もう時日も大分経ってしまったし、そうかと云つて、警察に頼める性質のものではなし、それに第一肝心なその子の人相が私自身にすらはつきりと見とめられてはいなかったのだから。……そうしてみれば、その子に、たとい身なりだけなりと似通っている君に、——そしてまた、変な事を云うようだが、その子だつてどうせ銀座辺にそうしていたのだから、やっぱり君たちの知合かも知れない——その君に、この五十円を上げるのは満更無意味でもなからう。……どうだい？ね、

わかつたろう。だから、遠慮しないでこれを全部持って行く方がいいよ。」

井深君は、そう語り終えて娘の方を見た。

すると、おどろいたことに、娘は両手を顔におし当てて、シクシクと泣いているではないか。そして泣きじやくりながら云うのである。

「——あたし、……あたし……なんて悪い子なんでしよう。……すみません、すみません。あなたみたいな良い方にそんな事をするなんて……」

井深君はびっくりした。

「おや、君は何を云い出すのだ？ 何を泣くんだ？……」

「あたし……あたしはその悪い子だったのよ。」

「え、君が」

井深君はハタと当惑した。なぜと云つて、井深君の今話して聞かせたのは、便宜上、そして無論揶揄半分の気持も手伝つて喋つた全然根も葉もない井深君一流の作り噺だったのだから。タイピンは、つい一月程前に新しく買ったものである。

(どこまでも途方もない小娘なのだろう……)

道の井深君も呆れ返つてしまった。が、なんぼなんでも今更自分でそれをぶち壊すわけにも行かない。井深君はまるで魔法にでもかかったような頼りない気持で娘の肩に手をかけて云つたのである。

「——もういい。もういい。泣くのはお止し。私は最早や何とも思つてやしないのだから。……いや、それどころか、今も云つた通り私はむしろ気の毒にさえ感じていたのだ。」

「すみません。すみません。……あんた本当にいい方ね。あの時だつてそう思つただのだけれど。……だけど、あの時のあたしの顔を思い出せないなんてないわ。ねえ、あたしだつたでしょう？……あたしの顔、よく見て。ねえ、もつとそばでよく見てちようだい。……」娘はそう云い乍ら目や鼻や顔が涙ですつかり濡れ輝いている頬を井深君の顔のすぐ前まで持つて来た。そして井深君の両手をつかんで、

「それから、あたしの手？　ね、ほら、冷めたいでしょう。まる

で氷のようだわ……でも、今は冬だから当にならないこと?……」
「うん、……ほんとに、君だったかも知れない。いや、全く君だったようだ。」と井深君はほとほと弱って云った。「しかし、そう判ったらなおのこと結構だ。このお金は当然君の物と云えるわけだ。だから早く蔵いなさい。私はもう帰らなければならぬのだよ。」

「嫌だわ、あたし、嫌だわ。あたしはもう五円のお金だつて欲しくないの一銭もいらぬの……」

「これ程事の道理がはつきりわかってもかい? 何という聞きわけのない子だろう!」

「どうしても嫌だわ。なんでもかんでも貰わなければいけないの

なら、いつそそのネクタイピンを貰うわ。」

「莫迦な、こんなピン十円にもなりやしない……」

「あら！ でも、あんた、今五十円位するってそう云ったでしょう。」

「うん、それは、併し、買値の話だよ。売るとなるとなかなかそうはいかない。」

「あたし売りやしなくってよ。だから、それをちようだい。」

「わからずやの子だね——」

井深君はそれでも為方がないので、タイピンをば取って娘に渡した。

「まあ、素敵！……ちよいと、あたしにだって似合うでしょう。」

娘は心から喜ばしそうに、そのピンを橙色の胸にさして、ちよつとポーズをしてみせながら明るい蓮葉な声で笑った。

「さあ、ほんとにそれでいいかね。……それでは、それでいいものとして、私はもう帰るよ。」

「待つて。あたしも帰るわ。」

それから二人はその家をカフェ・マンゲツを出た。おもてには雪がさかんに降りしきっていて地べたはもう隙なく塗りつぶされてしまった。二人とも傘がなかったので、再び雪に塗れ乍ら電車道まで歩いた。娘のお河童頭とオレンジ色のジャケットとは忽ち真白になった。

（あんなタイピンなんか貰うよりも、なぜ外套でも買うことをし

ないのだろう！ 考えれば考える程へんな娘だ——」

井深君は娘のその痛々しい有様を何とも云えない心持で眺めたのであつた。

電車道に出ると、ふと娘は立ち止まつた。そして、ひどく愁しそうな顔をして井深君を見上げて云つたのである。

「あたし、やつぱりお返しするわ、このピン……」

「うん、それがいい。それがいい。そして、やはりお金を持っておいで——」

井深君は、ほっとした気持で、直ぐ外套と上衣の釦を外してふところの手を差し入れた。すると娘はあわただしくそれを押え止めて、

「嫌よ、嫌よ。お金なんか!……あたし、つまんないわ。」と殆ど泣きそうな声でそう云うのである。

「だって、それでは可笑しいじゃないか——」

「いいの。その代り、お願いがあるのよ。このピンを、もう一つペン私の手であなたにささせて下さらないこと?……おいや?」

「ちつとも嫌なことはないが、しかし……」

「有難う!」

娘はちよつと背延びをし乍ら、井深君の首に片腕を巻きつけて、そしてそのタイピンをさした。それからそれが済むと、両手で井深君の耳をひっぱって、井深君に雪だらけの目と鼻と口とで接吻するが早いか、「サヨナラ!」と叫んで、威勢よく雪の中を駆け

出して消えてしまったのである……

*

*

*

「……僕は、それで呆然としてしばらく其場に佇んでいた。……」
と井深君は鳥渡言葉を切つて、軽い溜息を一つ吐いた。

「なんだ。それでお終いかい？ いやはや！ 僕たちは何も君の
ローマンスを聞く筈ではなかったのだが——」と聴き手の一人が
苦情を申し立てた。

「それでお終いにしてもいい。——それだと、それつきりだと誠
に可憐ではないか。……が、残念なことに未だ少しあとが

ある。……それは、なぜ僕がその場に雪だるまのようになり乍ら
呆然と立ち尽してしまつたかと云うことだ。君たちに解るかね？」

「なぜだ？」

「つまり、僕は自分の愚しい思い付きの嘘から、そのオレンジ色
の娘に如何にして僕のふところの紙入を盗み取るかを教えてしま
つたからさ——」

「なる程！小娘のために見事にしてやられたのだね。……が、と
ころで、どっこい、その紙入の中はまた古新聞の束ばかりだった
と云うのだろう！こいつあ傑作だね。は、は、は、は……。」と
始終探偵小説ばかりを愛読している友がしたり顔に云つて笑つた。
「いやいや、早合点をしてくれては困る。それ程あくどい洒落で

はない。——それに、そんな酷い細工をするには、相手はあまりに可愛らしい好い子だった。ざつと二千元。紙入の紙幣は全部本物だったよ……」井深君はそう云つて口を噤んだ。

「すっかり本物だつて？ 二千元！……」不思議な不安の影が居合せた人々の顔に行き渡つた。

井深君は、そこでこうつけ加えた。

「諸君、そんなに妙な顔をするものではない。紙幣は正しく全部本物だったが、安心したまえ。——この話全体は僕が考え出した嘘なのだから。」

青空文庫情報

底本：「アンドロギュノスの裔」 薔薇十字社

1970（昭和45）年9月1日初版発行

初出：「新青年」1927年3月

入力：森下祐行

校正：もりみつじゅんじ

1999年9月14日公開

2007年10月17日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www>

W.aozora.gr.jp) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランテイアの皆さんです。

嘘

渡辺温

2020年 7月13日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>